

国際開発 ジャーナル

International Development Journal

国際協力の
最前線をレポートする

JUNE 2023
No.798

6

<https://www.idj.co.jp>

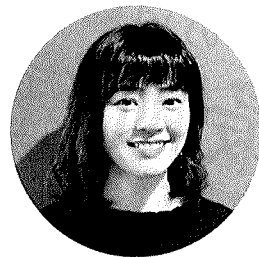
特集

農業増産支援の先へ

イノベーションが生む新たな食料システム

日本で国際開発を学ぶ

「内なるよそ者」が見るその現状と意義



東京大学 東洋文化研究所 特任研究員

汪 牧耘

昨今、国際協力機構(JICA)の「開発大学院連携」の取り組みなどを通じて「日本型開発経験」を世界に発信する動きが活発化している。一方、世界からみると、日本の開発研究は、英米はおろか、中韓などと比べても“後れ”を取っているという指摘もある。2014年に中国・貴州省からの留学生として来日し、現在東京大学東洋文化研究所で特任研究員を務めると共に国際開発学会(JASID)の人材育成委員会の幹事でもある汪牧耘氏が日本の開発研究の課題を指摘しつつ、日本で国際開発を学ぶ意義を語る。

開発研究で“後れ”を取る国、日本

「国際開発を学ぶなら、欧米に行くよね。何で日本？」

4年前、筆者が著名な中国人開発研究者に自己紹介した際、このように問われた。漠然とした思いで日本に留学し、国際開発に関心を持って間もなかった当時の筆者は、驚きや悔しさを噛み締めながらも、この問いにうまく答えられなかった。

確かに、日本で国際開発を学び、研究する意味は自明ではない。この分野で学術世界に絶大な影響力を持つのは英国や米国だ。それぞれ、植民地時支配の遺産や、近代化論の学理を援用・更新しながら

開発研究をリードしてきた。アジアでも中国や韓国が国を挙げて開発知識の体系化・国際化を推進している。2016年、世界シンクタンク評価で国際開発政策部門のトップになったのは韓国開発研究院(KDI)だ。さらに、2017年に設立された中国発展知識センター(CIKD)も自国の開発・援助経験を世界へ発信する政府機関として存在感を示している。

比べて、日本は戦後の早い段階で、国内の産業振興をはじめとする現実的関心から開発関連の調査を、アジア中心に進めてきた。各分野の蓄積、中でも地域研究は厚みもある。一方、それらの知見は個々の分野に散在して、「日本の

助(O DA)出資力だけではなく、学術面での影響力も黄昏に向かっているように見える。

「個別性重視」という常套句

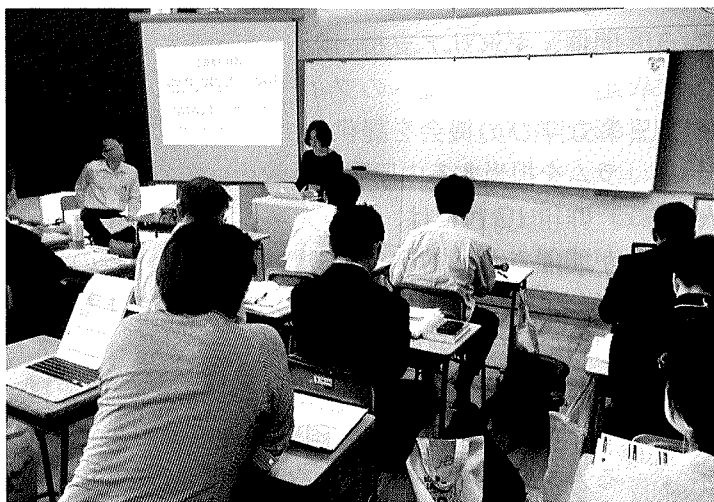
日本人研究者の多くも、国際的な発信の必要性を認めている。一方、学術誌の規範に合わせ、^{ばくぎつ}駁雑な開発経験を特定の体系や理論に押し込むことには抵抗を示す。

「それぞれの現場の文脈を踏まえた実践的知識を大切にすることこそ、日本の開発研究の特徴だ」と自負する日本人研究者は多いのである。

研究対象を個別の文脈で丁寧に観る重要性は否めない。筆者も画一化された開発の処方箋には反感しかない。それは欧米主導の開発実践が失敗を繰り返してきた一因とも思っている。しかし、個別の価値への偏重は、散在した知を整合する作業に必要以上の抵抗感をもたらす。そしてそれは開発研究の進展を阻む要因にもなりうる。

例えば、筆者も含め、開発研究の門戸を叩く若い研究者の中には「貧困」や「環境」など個別のトピックに対するぼやっとした関心を抱いている人や、何らかの個人

開発研究」
として括られたり、インパクトのある理論として打ち出されたりしたわけではない。そういう意味では、日本は政府開発援



2019年6月に岩手県陸前高田市で開催された国際開発学会(JASID)春季大会で個人発表を行う汪氏

的な経験をきっかけとしている人が多い。ところが、いざそのトピックや経験を自らの「研究対象」に定め、何らかの解釈や普遍性を導き出し、意味付けを行おうとすると、そのトピックを取り巻く経済、政治、社会、思想など膨大な関連分野があることに気が付く。

しかし、日本の開発研究では多様な分野の文脈とその関係性を俯瞰的に示すものが見当たらない。そのため、自分の関心事項がどこに位置付けられるのか、また、どこから何を研究すれば良いのかわからない——。そう苦闘している若い研究者は少なからずいる。

不足しているのは「全体像」の協創

開発研究とは、多分野の知見や技法を取り入れ、またぎながら考察を深める「学際的」な分野である。そのため、本来、この分野での研究を貫くには旺盛な元気が必須だ。しかし、過度な迷走で自分の旺盛な元気が消耗され、脱落していく若い開発研究人材たちはあまりにも多い。その結果、現在の日本の開発研究界は、この苦闘をなんとか生き残ることができた一握りの“能力者”がリサイクルされている状況ではないか、と筆者は危機感を覚えている。

日本の国際開発人材の土台を厚くするためには、どのような学生であっても、この世界を自分で探る道具と基礎体力を持たせることが求められている。その視点からみると、日本の開発研究の問題は、個性重視に端を発する「細部へのこだわり」かもしれない。そし

て足りないのは、国際的な発信や理論の生産というよりも、各分野・トピックの蓄積を再整合し、開発研究に携わる人々に方向感覚を与えるための具体的な全体像の協創である。

全体が分からないまま細部に巻き込まれてしまうと、細部すらものがはっきり見えなくなる。結果、同じ言葉が微妙な違いで復唱され、同じ到着点で議論は止まる。そして国際的な潮流にしたがい、環境保護や持続可能性などが、さも「新しい」開発課題であるかのように取り上げられ、どんどん横並びされるような状況は続く。

こうした状況を克服するため、「個性重視」という常套句に遅らせた知の整合を発動しなければいけない。その第一歩として、国際開発に関連する授業シラバスの公開データベースや、分野・トピックの寄せ集めを超えた開発教科書の作成を提案しておきたい。

日本で国際開発を学ぶ意義

最後に、冒頭の質問に改めて向き合ってみる。

意図せず日本で国際開発を学び研究することになったこともあり、4年前は回答することができなかった筆者だが、年月が経つと共にその意義に目覚めるようになった。日本の開発・援助経験は、宝の山のような歴史資料・記録として蓄積されている。それだけではなく、長年に築かれた「途上国」との絆や地域における国際協力の営みにも深い学がある。そして、留学生だった筆者を心から理解し、自ら

の知見を献身的に共有する先生方はかけがえのない存在である。一つ一つの出会いが積み重ねながら、筆者は「日本で開発研究に携われてよかった」と、確信するようになった。

何より、自分がこの研究を通じて「より良い人間になった」との実感である。ここ十年、中国は爆発的な社会変化を遂げてきた。日本から帰国する度に、東京よりも豪壮な街と斬新な技術に驚く。その中、日本の「先進性」はもはや経済的側面ではない。開発研究をきっかけに真摯な人と出会い、世界への関心が醒めたことや、逃げる対象でもあった「貧しい故郷」を再評価する視点を得たことなどこそ、筆者が留学することの醍醐味となった。

世界秩序の変化に伴う開発・援助競争が激しくなっている今日こそ、国際開発の学習者・研究者が互いに真の協力関係を結び、自国・自分分野の経験を相対化する工夫は不可欠である。ナショナルリズムと好相性の「我が国独自の〇〇」の確立や、他者に対峙するための自己認識の塗り替えは、思考の惰性に他ならない。

こうした惰性から自由になり、開発研究に共通する課題に真剣に向き合う土壌は日本にある——。ここに根を張ったひとりの「内なるよそ者」として、筆者はそう信じたい。

おう・まきうん

中国貴州省出身。中国で大学を卒業後、2014年に来日。法政大学大学院で修士課程を、東京大学大学院で博士課程を修了。国際協力学博士。2022年から現職